

乳児用新型コロナワクチン（6ヵ月-4歳）ファイザー社製

成分は大人用とほぼ同じ遺伝物質メッセンジャーRNA。ワクチンの用量は12歳以上の10分の1。3〜8週間の間隔を空けて、計3回接種。

海外の臨床試験（約4500人）で、副反応の頻度は5〜11歳に対して接種した場合よりも低かった。

小児用新型コロナワクチン（5-11歳）ファイザー社製

成分は大人のワクチンとほぼ同じ。接種量が大人の3分の1。12歳以上の若い大人用のワクチンより、明らかに副反応は少ない。アメリカでは、子どもに対して870万回もの接種が行われ、発熱は、1回目で7.9%、2回目でも13.4%。心配される心筋炎も11件と、若年成人と比べて大変少なく、全員軽症で治癒した。心筋炎に関してはワクチン接種後よりも感染後の方がはるかに高い発症率になり、重症になる。また、接種部位の腫れや痛みも、大人よりもやや少ないとされる。

*オミクロン株になり、小児の新型コロナウイルス感染症は著増しました。多くは発熱と咳程度ですが、中には酸素投与や人工呼吸を必要としたり、感染後の後遺症で苦しんでいる場合があります。また、次の新たな変異株が出現することも予想しておかなければならず、それが子どもたちで軽症であるという保証はまったくありません。現在のワクチンは、今までに出現した変異株のうち、アルファ、デルタには感染予防効果や重症化予防効果が、オミクロン株についても重症化

予防効果が認められています。基礎疾患のある子どもさんは是非接種してください。

また、健康な子どもたちにとっても、将来の潜在的なリスクへの備えとしてワクチン接種は必要と考えます。

<ワクチン接種の感染予防以外の社会的な目的>

*今の子どもたちは、部活動で感染者が出たら試合に出られない、学年で感染者が出たら合宿は中止になる、受験の日に感染していたら不利になる、子どもが感染したら親は濃厚接触者となり仕事にいけなくなる・・・自分が感染したら学級閉鎖になってしまうといった心配と、さまざまな社会的プレッシャーにさらされています。ワクチン接種はこれらから逃れるために、あるいはリスクを減らすため有益です。

*また、オミクロン株とはいえ高齢者がかかると、重症化する方があり、家族を守るという意味合いもあります。

★自然感染とは野生のウイルスが身体に入ってくることであり、非常に危険な弱毒化していないワクチンを受けるようなものです。ワクチンがない時代には、その病気に対する免疫をつけるには自然にかかるしかありませんでした。しかし、自然感染は危険すぎるので、多くの資金と技術でワクチンが開発されました。今の主流はメッセンジャーRNA（mRNA）ワクチンです。mRNAは体内で増えることはなく、ワクチンによる長期的な影響はほぼゼロです。新型コロナウイルスの表面のトゲトゲ（スパイク蛋白）部分を作る設計図としての役割をし、一定数のスパイク蛋白を作ると、その役目を終えて、短時間で壊されてなくなります。人の細胞の核にも入らないので、ワクチンを受けた人の遺伝子を変えることは絶対にありません。自然感染してしまうとウイルス遺伝子は非常に勢いで増殖し、体の中で増えて、病気を起こし、周りの人にうつしてしまいます。ワクチンは病気を起こさず、勝手に増えもしません。明らかに自然感染より安全と考えられます。

